

学校名 鈴鹿市立神戸小学校
学校長名 津田 由美子

令和7年度 校内研究実施計画書

1 研究主題

主体的に学びに向かう子の育成
～自分の考えを伝え合う対話的な活動を通して～

教科:全教科

2 主題設定の理由

(1) 学校目標から

本校は「今日も来てよかった、明日も来たいと思える学校」を学校教育目標に掲げ教職員全体で教育活動に取り組んでいる。三世代が同居する家庭に育ち、ゆったりとした生活を送っている子や、様々な事情でいろいろな思いを抱えながら生活している子、また外国にルーツをもつ子など、生活経験や生活背景の異なる多様な子どもたちが共に学習している。子どもたちは、素直で明るく、与えられた問題に対して真面目にこつこつと努力することができる。また、困っている子には手助けができ、周りのなかまに思いやりの気持ちをもって接することができる子も多い。

一方で、自力解決等で、自分の考えをもてる児童は増えてきたが、全体討議で自分の考えを説明したり、友達の考えと自分の考えを比較しながら聞いたりする力に課題があることが見えてきた。また、全国学力・学習状況調査やみえスタディ・チェックの結果からも、他者の考えを活用し、図や式、言葉を使って表現するような記述式問題の正答率が低く、説明する力に課題があることがわかった。

そこで、「自分の考えを伝え合う対話的な活動を通して」を副題に掲げ、「主体的に学びに向かう子の育成」を研修主題として設定し、職員全員で研究に取り組んでいく。

(2) 昨年度の研究から

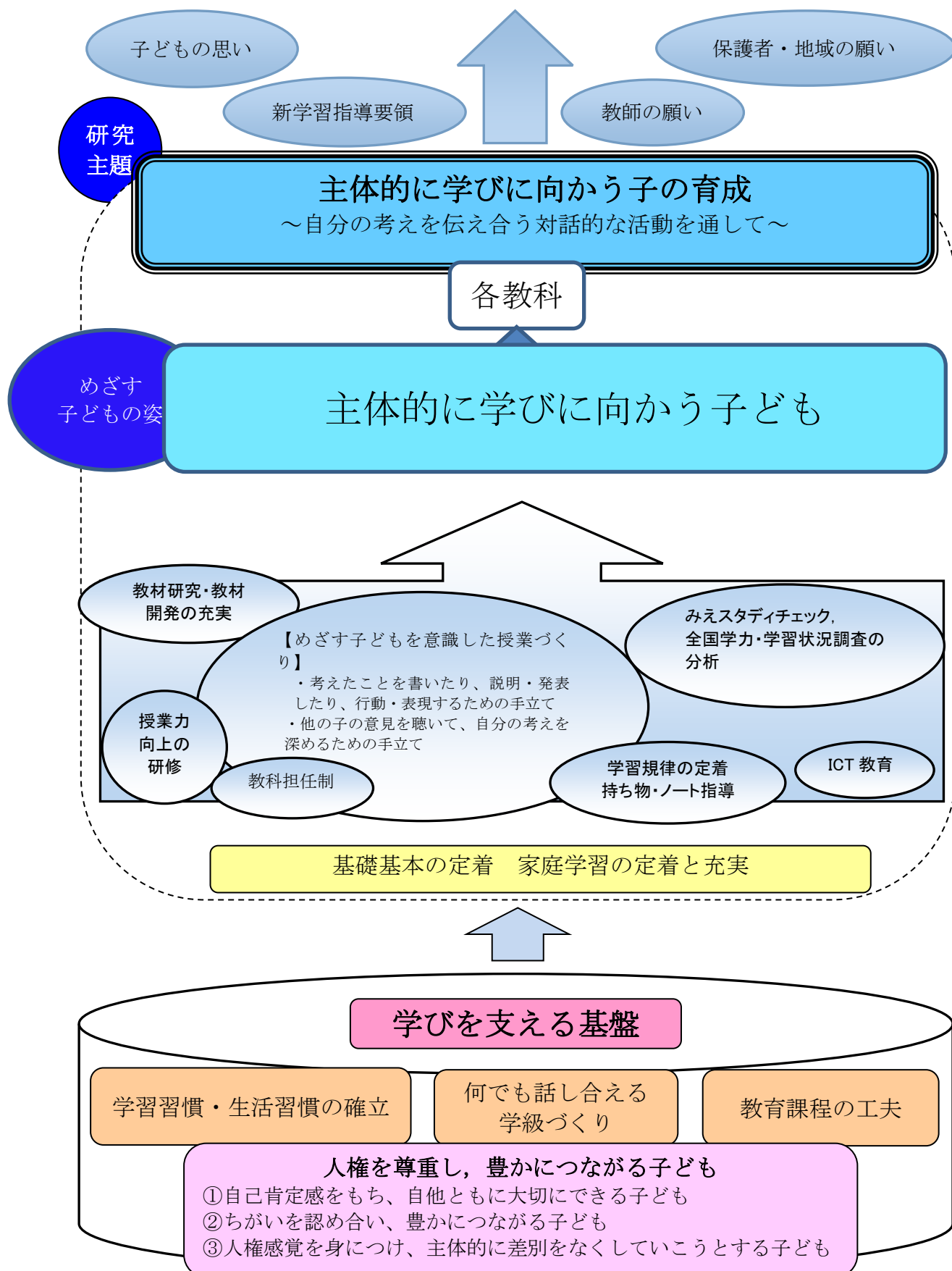
児童が自分の考えを表現したいという気持ちをさらに高めていく必要があることが課題である。本校の児童は、学校アンケートにて、「授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分で取り組むことができた」と約8割の児童が回答しており、課題に対して何かしらの自分の考え等をもつことができる。しかし、自分の意見をもつことができても、それを周りに積極的に伝える力が弱いと感じている教員が多数いる。なぜ、意見をもつことができているのにそれを周りに伝えようとしないのか、児童が本当に学びたい・伝えたいと感じている課題設定であったのかふり返る必要がある。また、周りの考えをもっとききたい、自分の考えを構築していくために伝えあいたいと思えるような場が設定できていたのかもふり返る必要がある。自分の考えを表現したいと思うには、自分たちの意見を出しあい、協働的に答えや問題解決にたどり着いたことのある経験、達成感を児童に味わわせることのできる授業構成にしないと、児童は自分の考えを周りの児童に伝えたいという気持ちにはならないと考える。

また、教職員一人ひとりの主体性をさらに高めていく必要がある。日々、さまざまな業務に追われる中で、大変な日々を過ごしている点に関しては理解できるが、教師として「授業力」を高めることは、必要不可欠なことである。昨年度の研修のふり返りの中で児童の弱みについての項目を設けた。そこに、自ら考え、判断し、行動する力が弱いと回答した意見があった。そのような児童を育てたのは、私たち神戸小の教員であり、そもそも、教員自身がその弱みに当てはまっていることもあるのではないかと危惧している。

そのため、児童と同じで、やらされている研修では、教員の主体性は生まれず、そのような教員が行う授業では、主体性をもつ児童を育むことはできない。そこで、校内研修の意義や授業公開の必要性について、再度全員で共通認識をもち、すべての教員が同じ方向に確実に進むことのできるようにしなくてはならない。

3 研究の構想図

【めざす学校像】 **今日も来てよかった、明日も来たいと思える学校**



4 研究仮説について

仮説① 手立ての工夫

児童・学級の実態をつかみ、考えの引き出しを刺激するような手立ての工夫をすれば、自分なりの考えを持つことができると考え、自分の考えを伝え合える子どもを育てたい。

仮説② 発問や教師の出場・関わり方の工夫（授業と子ども、子どもと子どもをつなぐ授業）

学び合う力をつけるためには、子ども任せの授業や教え込む授業ではなく、子どもとともにつくる授業が有効であると考え。授業の関わりや板書の工夫などを通して、一人ひとりの多様な考え方を意図的に引き出したり、わかりたいという思いを持続させ、粘り強く課題に向きあわせたりする。その中で、友だちの考えを手がかりに自分の考えを見直したり、課題についての見方を変えて考えたりしながら、自分の考えを統合的・発展的に考える力を高めていきたい。

仮説③ 授業の参観・交流・助言

授業改善を進めるためには、個々の取り組み意識を向上させる必要がある。また、チーム神戸として「いつでも」「何でも」相談しあえる学年部づくりを進め、教材研究や児童理解を多角的な視点で行い、授業を参観する回数を増やし、多くの指導方法にふれあい、自らの支援・指導に活かしていきたい。仲間や外部講師からの具体的な助言や指摘を受け止め、自らの指導癖や教師としての姿勢を常に問い直し、互いに高めあえる教師集団づくりを進めながら、子どもたちの学びを確かなものにしていきたい。

5 研究主題・副題のとらえ方

（１）研修主題「主体的に学びに向かう子の育成」について

「主体的」とは

- ①身の回りのことや社会に関心を持ち、意欲的に活動すること。
- ②自ら課題をもち、筋道を立てて考え、課題解決に臨むこと。
- ③学んだことや身に付けたことをもとに次の課題や他の教科に生かすこと。

以上のことを踏まえ、主体的に学びに向かう子どもの姿を以下のように設定する。

	主体的な姿
子どもの姿	・考えたことを書いたり、説明・発表したり、行動・表現することができる。 ・他の子の意見を聴いて、自分の考えを深めることができる。

（２）研究副題「自分の考えを伝え合う対話的な活動を通して」について

「手立て①」

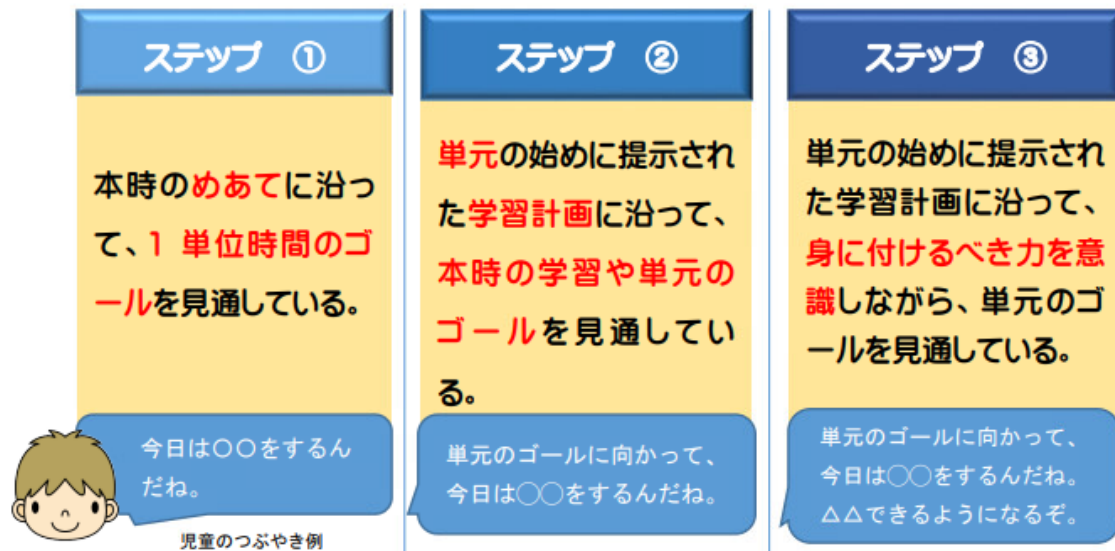
単元の見通し・１時間の見通しをもった授業づくりを行う。

「見通しとは」

目の前の目標や課題達成のために、どのような学習過程が必要か、児童自身が理解していることを指す。見通しをもった学習に取り組むことで、授業に対する目的や必要性を実感でき、粘り強く学びに向かうことができると考える。

「見通しをもたせるために大切なこと」

- ・単元のゴールを明確にする。
- ・１時間ごとに課題やめあてを明確にする。
- ・単元を通した課題やめあてを子どもの思いや発言を加味しながら立てる。
- ・単元を通した課題やめあての解決に向けた学習計画を作成する。



「手立て②」

一人ひとりが自分の考えを表現する。

「考えを表現するとは」

考えを表現する方法は発言すること、ノート等へ記述することなどがある。ノート等への記述は、文章だけでなく絵や図、表、グラフも含まれる。教科によっても表現方法は変わる。前述の2つ以外にも、動きや表情も表現方法の一つである。

自分の考えを他者に伝える際には、相手意識をもち順序立てて、自分の考えを表現することが必要である。

「自分の考えを表現する」ために大切にしたいこと

- ・表現する術を身につける指導。（言葉、文、式、グラフ、ICT、ワークシート）
- ・ICT の積極的な活用（実物投影機、オクリンクなど）
- ・自分と対話する（振り返りでの自分の考えの変容、新たな問いの発見）
- ・根拠を明確にもち、考えを伝える指導。
- ・自分の考えを伝えるときの手助けとなる「話型」（学年に応じて作成）
- ・相手意識をもって伝えることができているかどうか
- ・子どもたちの実態に応じた学習形態の工夫（意図をもったペア学習、グループ学習など）
- ・子どもが自分の意見を伝えたいと思う学習課題となっているか

「手立て③」

ペアやグループ等、少人数での学習形態を取り入れ、学び合う場を設定→協働的な学習・対話的な学び

・ペアやグループ等、少人数での学習形態の工夫はこれまでも多くの学校で研究されてきた。ペアやグループ等、学習形態の工夫は手段であり、目的ではないことや、利点・欠点（弊害）があることに十分注意する。

→ペア・グループ学習の仕方の共通理解、学習指導案に設定場面、ねらいを明記

・ペアやグループ学習を通して、子どもたちに自分の考えを説明する力、友達の考えと自分の考えを比較しながら聞く力をつける。全教科で見方・考え方を働かせ、主体的・対話的で深い学びにつなげる。

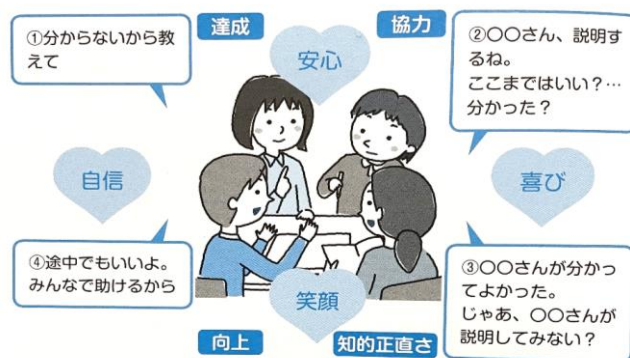
【学びあいの授業の準備をしよう】

○ 学びあいの授業とは

仲間との関わりの中で、お互いの考えを交流させ、聴いて考えて伝え合うことで、考えをつくったり考えが広がったり深まったりして、自分や仲間の進歩を実感できる授業と考える。

○ グループ学習の進め方

- ・机を合わせ、顔を見て話し合おう。
- ・誰かが口火を切ろう。
- ・メンバー全員を意識して話し合おう。
- ・仲間の様子を気にかけてよう。
- ・異なる意見を話題にして、よりよい考えについて話し合おう。
- ・自分たちの意見をまとめよう。
- ・学び合いを振り返ろう。



6 めざす子ども像

考えたことを書いたり、説明・発表したり、行動・表現することができる。

他の子の意見をきいて、自分の考えを深めることができる。

「考えを表現する」とは、子どもは様々な方法で自分の考えを表現しており、発言すること、ノート等へ記述すること、音読や身振り手振りなどを使って表現するなどである。

自分の考えを他者に伝える際には、相手意識をもち順序立てて、自分の考えを表現することが必要である。

「自分の考えを表現する」ために大切にしたいこと

- ・ICTの積極的な活用。(実物投影機、オクリンクなど)

ICT機器の活用を通して、個別最適な学びと協働的な学びを進める。

【個別学習】 自らの疑問について深く調べる、自分にあつた進捗で学習を進めるため、個々の理解や関心の程度に応じた学びを構築できる。

(例) インターネットを用いた情報収集、写真や動画による記録、スライドやドキュメントを用いて自分の考えをまとめるなど

【協働学習】 子どもどうしによる意見交換、発表などお互いを高め合う学びを通して、友だちと協力しながら課題解決を進めることができる。

(例) グループや学級全体での発表・話し合い、グループで分担・協働しながら資料の作成、学校の壁を越えた交流学習など

- ・表現する術を身につける。(言葉、文、式、グラフ、ICT)
- ・自分と対話する(振り返りでの自分の考えの変容、新たな問いの発見)
- ・自分の考えを伝えるときの手助けとなる「話型」。(学年に応じて作成)
- ・子どもたちの実態に応じた学習形態の工夫。(ペア・グループ学習など)
- ・相手意識をもって伝える。

7 研究の方法

(1) 研究授業について

- ・全体研は低・中・高・特支の中から3本(中学年部は人権の研究授業)を原則とする。
- ・全体研の指導案検討は、各学年部で行う。
- ・全体研を行わない学年は、学年部で公開する。
- ・授業公開→事後検討会の流れを基本に進める。事前説明会も設ける。
- ・指導主事、指導教諭からの助言指導により充実を図る。

- ・できれば1学期に1本は授業を公開したい。そこで研修の方向性を示し、全職員で研修の方向性についての共通理解を図る。公開する場合（1学期は行事等で忙しい）は、指導案は略案程度でもOK。
- ・完結するきれいな授業を目指すのではなく、少し冒険がある授業も必要。
- ・できるようになることも大切だが、子どもの思考の過程を授業で見る。
- ・子どもが悩み、考え、もがきながら課題に向き合う姿やそこでの教師の働きかけ等も研修材料となる。
- ・学年の課題（弱み）を考慮して領域を決める。
- ・公開1週間前を目安に、指導案事前説明会を行う。事前説明会では、学年の取り組みなどについての説明を受け、子どもの実態、授業のねらい、子どもたちにつけたい力などについて共通理解を深め、授業の参観に臨むこととする。
- ・提案授業の参観について・・・参観者は児童に声をかけない。
- ・全体研は全員が参観する。部内研は学年部の先生は必ず参観する。先行授業に関しては、任意とする。（学年または学年部でどのように参観するか相談する。）
- ・研究授業当日の役割分担（記録・写真撮影・ビデオ等）は、それぞれの学年・学年部の中で協力して行うこととする。
- ・事後検討会にはよい点や課題等を付箋に記入して臨む。
- ・事後検討会は必要に応じて話し合いの形態を工夫する。

（２）校内研修について

年間を通して授業研究及び今日的な教育課題の解決へ向けた校内の研修を実施していくこととする。研究授業の開催日等については、授業提案学年の意思を第一に考え、水曜日以外の日程においても授業日を設定することとする。尚、水曜日以外の日程で研究授業が実施される場合は、その日を水曜日課の5限授業日と設定し、放課後に事後検討会を実施する。

また、校内研修とは別枠でミニ研修会を実施していく。研修内容は、教職員の授業力向上につながる内容とし、学級経営に関するもの、特別支援教育に関する内容等、幅広く取り扱うものとする。

（３）【神戸小学校 校内研修の進め方】

○誰でも、気軽に授業づくりについての相談、話し合いができるような研修会の雰囲気大切にする。

- ・「こんなことは、言うてはいけなかな？」「経験が浅いから、発言は控えよう」「間違っているかな？」など、発言を躊躇するような研修会の雰囲気を作らない。さまざまな視点からの意見や感想、考えがあつてこそ、議論が深まり・広がっていくのである。
- ・校内研修の形式についても、内容によっては、席順を変えたり、メンバーを変えたり、話し合いのスタイルを変えたり、色々な人と意見交換ができるようにしていく。
- ・我々教師自身が、まずは「学び合う集団」になること。

○授業を互いに見合う機会や授業づくりについての相談が日常的にできる雰囲気を作る。

- ・「研究授業があるから・・・」ではなく、日常的に授業に関する話ができる職場環境にしていく。
- ・教室は開放的に、そして授業の参観を気軽にできるようにする。

○研究授業は、授業の失敗や成功を問うのではなく、より良い授業づくりをめざすための提案授業。

- ・授業者（提案学年）は一番成長できる、いい機会であるということ。
- ・授業者や提案学年の考えを尊重することを第一に、みんなで練り上げていくのが研究授業である。
- ・授業後の成果と課題は神戸小の成果と課題として受け止め、次へと繋げる。

○教科研修以外の研修についても学ぶ機会を大切にする。

- ・ミニ研修会の実施。（学級経営や他教科の指導方法など）
- ・各人が研修会で学んだ内容の積極的な還流。

(4) 習熟度別少人数指導

- ・ 4、5、6年生の算数科で、習熟度別少人数指導を行う。
- ・ 各単元のテストの結果及び児童のアンケート結果からコースを選択する。
- ・ それぞれのコースの児童の実態に合わせて授業づくりを行っていく。

(5) 授業力向上に向けた取り組み

- ・ 参観ウィークに自主授業公開を行い、授業を見合う。
- ・ 参観同日に、ミニ事後検討を行う。

(6) 基礎・基本の定着に向けて

- ・ 家庭学習の定着と充実
- ・ 学習規律の徹底やノート指導の統一

(7) 個人研究レポート

教員の主体性を育むためにも、教員個人としてもどんなことを中心に研究を進めていきたいか、どんな教科を中心に研究を進めていきたいか、年度初めに考えてもらう。

一人一つ研究テーマを考え、その研究テーマのもと、それぞれが研究を進めていくという方法で研究を進める。

8 研究計画

月 日	内容
4月4日(金)	校内研修① 校内研修で大切にしたいこと・授業づくりについて
4月4日(金)	ミニ研修① 学級開きについて
4月11日(金)	全体研・学年部研 授業者決定〆切
4月10日(木)	学力強化週間(6年学調4・5年みえスタ取り組み強化週間)
4月17日(木)	全国学力調査テスト 国語・算数・理科(6年) みえスタ 国語・算数(4・5年生)
4月22日(火)	児童質問紙調査(6年)
4月30日(水)	校内研修② 今年度の研修の方向性を共有する。
4月30日(水)	校内研修③ 学調・みえスタ 採点・分析
6月30日(月)	校内研修④ 学年部公開授業①
7月下旬	校内研修⑤
月日()	校内研修⑥ 全体公開授業①
月日()	校内研修⑦ 学年部公開授業②
月日()	校内研修⑧ 全体公開授業②
月日()	校内研修⑨ 学年部公開授業③
月日()	校内研修⑩ 全体公開授業③
2月下旬	校内研修⑪ 研修の反省等

参考文献：新しい研究授業の進め方 田中博史・河内麻衣子（東洋館出版社）